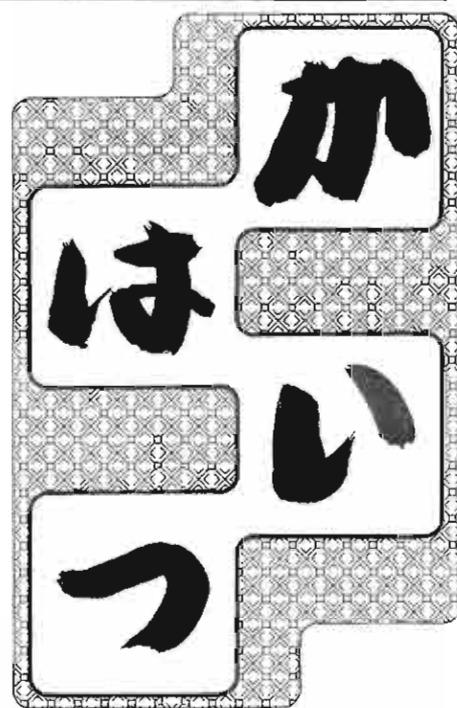


絵 美合小5年 運動会の絵より



(題字 岩津小 4年) 第14号

岡崎市特殊教育
推進協議会

昭和60年12月24日発行



主役の表情

特殊教育部長

中根清巳

文学どおり、触れ合って学ぶ温かな雰囲気。生活感のあるこまやかな環境。その中に生まれる心の交流。特殊の教室を訪れて「いいなあ」と思うことがある。つい嬉しくなってしまうが、ほかに欲しいものがないわけではない。

ないものねだりを承知で言えば、集団としてのチームワーク、成就感にうら打ちされた活力、それがほしいのだ。それは、たぶん特殊の教育を思うみんなの望みであるに違いない。

「子どもと親の集い運動会」は、まさに、そんな願いや期待の中で始まったのだ。

迎えて三年め。市体育館に集う、そのことだけでも胸がおどるというのに、全市の友だちが四つのチームをつくり、一緒になって競う。負けまいとする意欲が溢れて、一人ひとりに「主役の表情」が生まれる。運動会は、確かにこの子どもたちに「みんなの力」の強さと、「みんなでする楽しさ」を感得させてくれた、そう思う。

さらに素晴らしいのは、子どもと親と先生が一つになって心を開き、手を結び合ったことだ。子どもを育てるための固いチームワーク、運動会はそのモデルでさえあった。

それにしても、運動会を支えてくださった大勢の方々の善意に、心から感謝を申し上げたい。

どろい



集いを通して

岡崎市内小中学校の特殊学級に学ぶ子どもたちの運動会が九月九日、同市体育館で開かれた。子どもたち同士のおれあいを深めようと、同市現職教育委員会特殊教育部の主催で四年前から毎年合同交流会を開いており、運動会は今回で三回目。

この日は小学校二十一校二十五学級、中学校十一校十八学級の子どもたち二百二十六人をはじめ、保護者や特殊学級担当の先生ら約四百四十人が参加。全員体操のあと、四つのグループに分かれて平入れや徒競走、大王送りなどの競技を楽しんだ。

快い汗を流した子どもたちは、

プログラム

- | | | |
|---|----------|-----|
| 開 | 会 | 式 |
| 演 | 技 | |
| 1 | たいそう | 全 員 |
| 2 | たまれ | 全 員 |
| 3 | かけっこ | 小・低 |
| 4 | つなひき | 中・親 |
| 5 | かけっこ | 小・高 |
| 6 | 食 | 全 員 |
| 7 | むつなサーキット | 中 |
| 8 | 運動手はきみだ | 小 |
| 9 | 徒競走 | 中 |
| 閉 | 会 | 式 |

宮崎幸代さん(西宮)同市欠町狐ヶ入六ノ八ノ八からプレゼントのあったチャリティコンサート収益金で用意した文具セットなどが加賞として全員に贈られ、大喜びだった。

(東海愛知新聞の記事より)



開会式

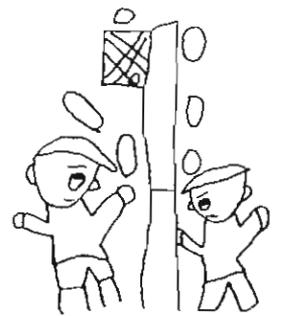
まぶさの声

ぼくは、朝からゼッケンのついたシャツを持って、学校へ行きました。うれしくて、空で着たりぬいだりして、きのうから、楽しみにしていました。かけっこでは、負けてしまいました。ぼくは、みんなの顔が見えると、なんだかはずかしくて、走れませんでした。

さいこのジャンカの時は先生や、お母さんたちといっしょで楽しかったです。ぼくの組の内ヶ崎君が、さいごまで、かちのこりました。ぼくは、始めからあきらめたが、内ヶ崎君が、つよかったです。ぼくも、うれしかったです。ぼくも、負けたくないように、とどろくとぼくも思いました。



井田小 四年



たまれれたよ。おどりのたまだよ。たたくたたく。あたまにおちた。おどりのたまよ。ばんざいしたよ。

でんしゃゴッコをしたよ。けいりちんとやりました。けいりちゃんね。おぼろしさをかぶったよ。しゃしよにさかしたよ。

ふれどうかい。まじまじとやね。

羽根小 四年



親と子のつどい うん



明るい集い

岡崎市教育委員会
糟谷正孝

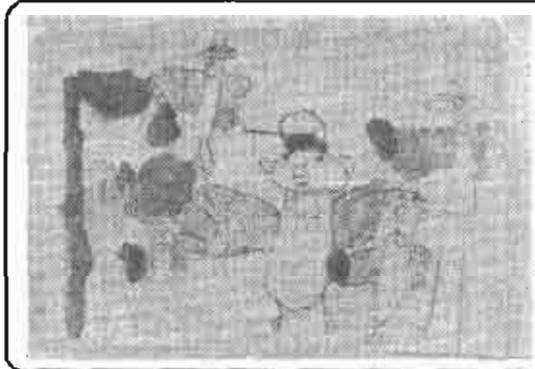
秋の気が市体育館をつつむ。小学一年から中学三年まで、岡崎の東西南北から集った手をつなぐ子等の大運動会。楽しいっぱいの笑顔、真剣そのもののまなざし、持てる力をいっばい出し合った競走、いたわりと励ましの飛び交う美しい風景、これが今日の子と親の集い運動会だ。

入場式の音楽に合わせて、一生懸命に歩く小学生、大きな旗を先頭に胸をはって歩く中学生、孤に並ぶ体育旗の中心に立って宣誓した代表選手の力強い声等等、参加者のひとりとして喉の奥に熱いものが流れる。

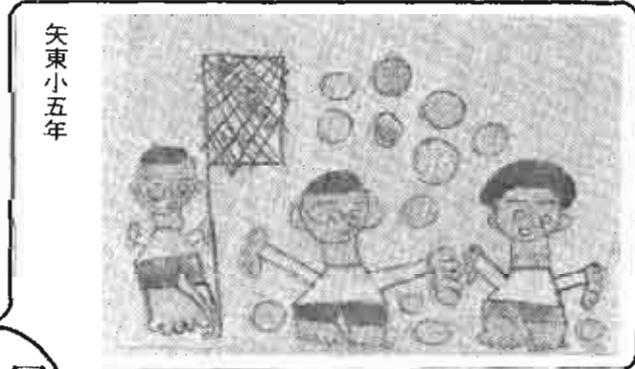
走りっこする子は、みんな春の野を駆ける感じ。お兄さんやお姉さんが速くで呼んでいるから走るんだ。一番でも二番でも五番でも六番でもちつともかわらない、あらしいのいな走りっこ。走ることが面白くてたまらない走りっこ。みんなの足の下の草がいつしよに風にゆれていく。横を見ながら走る子、真剣

な顔でなかなか進まない子、先生のスカートを持って走っている子、明るいオリンピックだ。玉入れの高い籠が立てられる。用意、そら投げる。あつちからもこちからも玉が飛び交う。うまく籠に入る玉、ぶつかって分れていく玉、とんでもない方向へ流れる玉。玉の噴水が籠の中に吸いこまれる。お母さんの目も先生の目もみんな籠にたまる玉を見上げる。ひとつ、ふたつ、四つのグループが一斉に数える。だんだん声が大きくなる。最後に上った玉が大井にとくと、拍手とバンザイの聲が館内にみぎる。

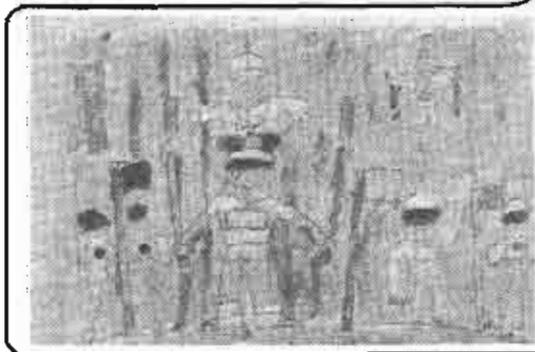
これがぶつつけ本番の運動会。体育館が拍手でふくれる。愛にみちたお母さんと先生のあたたかい心がムン／＼する。生きていく喜びと感謝の明るいムードが館内にあふれる。この純な子等よ、未来に伸びてほしい。持てる力を広げてほしい。尊い親の祈りがしみじみと伝わってくる一日であった。60・9・30



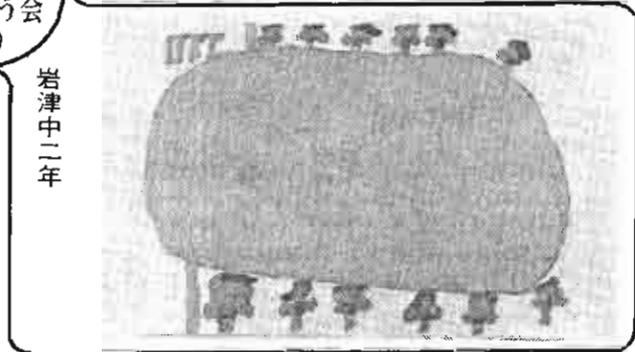
福岡小二年



矢東小五年



大樹寺小四年



岩津中二年

作品展
うんどう会
より

教師の声

アンケートより

○実施の時期について

・少し早いようにも思うが、よかったのではないかと。

○場所と会場について

・雨や風の心配もなく、市の体育館は、一番よいと思う。

○送迎の仕方について

・K君のこと
益前の日曜日、卒業以来何年ぶりかのK君が訪ねる。すしをつまみながら、○○小学校当時を語り合う。

・あの子が
当時、何を聞いても知らん顔、いつも青っ鼻を二本出し給食の時などいっしょに入っていたこともあった。一位数十二位数ぐらいの計算か、自分の名前がかけ、ひらがながやつと読み書きできるくらいだった。しかし、自分の目につく物を拾っては一人で何かしら組み合わせて作っては喜んでいただけを思い出す。K君

・バスの送迎は、好評で続けてほしい。
○日程・進行について
・よいと思う。ただ昼休みがもう少しゆつくりできるともっとよかった。

○演技について

・入場行進は、実に立派にできたが、先に入った学校からとまって待つようにさせたい。

○演技について

・入場行進は、実に立派にできたが、先に入った学校からとまって待つようにさせたい。

・開会式をもう少し短くするよりに考えたい。
・召集が長くかかったようだが、確認をしなければならぬから無理かも知れないが……
・レクリエーション的な演技も変化があつて良いのでは……
よかつた演技は

かかつた演技は
六名サーキット・運転手は君だ
考えた演技は

いつも思ひこ

男川小 鈴木 滋

滋

よくなシステムも考えていく必要があるのではないだろうか。その子の適性に合わせた職業実習をやるなり学校での作業訓練をするなり色々考えられると思う。

・こんなことをしては
もう何年位前になるだろうか？
県の特殊教育研究大会の発表の中心に北設の中学校での実践について

・あの子が
当時、何を聞いても知らん顔、いつも青っ鼻を二本出し給食の時などいっしょに入っていたこともあった。一位数十二位数ぐらいの計算か、自分の名前がかけ、ひらがながやつと読み書きできるくらいだった。しかし、自分の目につく物を拾っては一人で何かしら組み合わせて作っては喜んでいただけを思い出す。K君

全体の歌（歌の入ったテープを使用したら……）
入れたい演技は
小中合同の種目・親子ペアでできるもの
○チーム分け、応援について
・毎年チームが変わって大変だ。人数の上で仕方ないと思うが、親も同じ色のゼッケンをつけてもらうとよくわかると思う。
・応援は、チーム単位で考え、中学生中心でリードするとよいのではないかと。

○昼食・席について

・天気の良い時は、外で父兄と話し合いながらの食事もよいものではないか。

○賞状・賞品について
・手製の賞状、たくさん賞品子どもたちは、大喜びだ。

○係分拍・準備について
・多くの方が協力できる体制にならないものか。

○その他
・父兄の出場が少ないようだ。「父兄の声」
・楽しい会で、他の学校の方々と話せ、大変有意義で、ぜひこれからも続けてほしい。

○家族参加のできる日曜日になればもつとよい。
○父兄の手伝えることはないのでしょうか。

アンケートの結果から項目を追つてまとめてみました。
今年の反省から、来年はよりよい「親子の集い 運動会」が実施できることを願っています。

男川小
鈴木 滋

シエシカ



特殊学級のできたころ

あれ・これ

松井筆 埜

梅園小学校在職二年目の昭和三十三年、特殊(精薄)学級が新設され担任することになりました。「この本を読んで研究するよう」に。後藤校長先生からいただいた本は、難解であつたけれど私の不安を幾分和らげ、気構えを作るに役立つと記憶しています。

担任した学級は、進級の際に五クラスからの学習不振児各二、三名、計十五名の二年生でした。一年間少人数で指導し、三年生進級と共に原学級へ戻すという方針で出発した促進学級でした。子供の顔ぶれは、ポリオ、脳性小児マヒ情緒障害など、それぞれ原因からの学習遅延児でした。しかし、精薄児ではなく、普通児または境界線児でした。

生育歴の基礎学力などの調査は当然のことながら、当時の私は意気込んで取り組んだものでした。「読む・書く・数える」の基礎的なことを学習の主軸にし、促進的な扱いに明け暮れたのは「一年間で原学級へ戻す」ことが意識の底

にあったからでした。

当時は特殊学級は少なく、研究も今日程進んでいなかったと思います。会合で一緒にする連尺小の磯谷先生から度々、「特殊学級の



当時のスナップより

主旨から外れている」と、ご批判ご指導をいただいたものでした。附小の畑中先生からも、豊田の先進校のお話を聞き見学に出掛けました。生活指導に重点がおかれていて私の学級の子供と質的に違っ

ていたことも思い出されます。事実、最初に受け持った中の二人は公立高校を卒業し、母親としてりっぱに生きています。

梅園小には虚弱児の養護学級があり着実な経営がなされていきました。しかし対象児が減少したため、三年目に精薄・虚弱混合の一年担任になりました。校医さんが入級可否かを判定されましたが、親子の風体を観て決められたふしもあり、実におおらかなものでしたがトラブルもなかったのです。

虚弱児は知能の高い子が多く、学習差のひろがり、極端な過保護と放任の育ち方、カリキラムの連いなど、多くの問題を持っていました。協力的な親が多く助かりました。特に、夏休みに「規則的な生活習慣のみだれを防ぐ」を目的として、夏時間の八時(今の七時に特殊学級だけ二週間登校させました。親子ともたいへんだったと思います。

特殊学級担任の五年間、個々の子供と深くかわりあうことができたため「子供に対して教師は何をすべきか」が体でわかり、大きな収穫でした。そして以後の教師生活に少なからず影響したと思っています。

情緒障害サークル

美川中 野村正文

学校生活から生じてくるいろいろな問題点の解決方法の多くは、マクロ的分析がそのほとんどであろう。非行問題もいじめの問題もそうした指導がみられる。こうした問題は、ミクロ的に分析し、指導する以外根本的な解決は見い出せないであろう。

自閉症のMは、授業が終ると必ず教師のところへやってきて、「先生、ぼくに勉強おぼえてほしいかったですか?」と、確認しにきます。

「そうだよ。覚えてほしかったんですよ。」

と言えば、彼は安心するが「ぼくに勉強おぼえてほしかったですか?」

という質問に強くこだわって、「覚えてほしくありません。覚えて下さい。」とか、「覚えなければ授業をうけなくていいよ。」などという返事をくりかえすと、とたんに、平手うちとか頭突きといった行動が出てきます。

情緒に障害をもっている生徒の言動を一つ一つにこだわりつけ考え指導していくことが大切ではないでしょうか。



学校でのお楽しみは?

福岡中一年六組

土曜日の3時間目の道徳の時間「今日の昼めしは何を食べる?」きまってこの言葉が出てきます。こんな調子で、授業中のあい間は食べ物のお話ばかり。その中でも心は、なんといつても給食。

「今日は、プリン2人分くれ。」
「私、ソーセイジがほしい。」
「きのうの給食食べたかったな。」
など。みんな職員室の余りを狙って、給食の時は目の色がちがいます。特に元気のいいのは、丁君。

「牛丼食たい。」が口癖です。勉強の方もがんばろうね。



給食の時間